史遊サロン通信

No 264号
平成30年
5月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@jcom.home.ne.jp
新井宏

米朝トップ会談

何か書こうと思うと、気になるのは、米朝トップ会談のこと。完全な核廃棄に至らなくとも、その流れを作れば大成功と考える文在寅は、運転席に座ったつもりで、肯定的、宥和的な展望を盛んに振りまいている。それに対して、過去の経過をよく知る専門家達は、懐疑的である。

このゲーム、いまのところ金正恩が完全にリードしている。過去二十年間、北朝鮮は常に米国首脳者との直接会談を渇望しながら、全く無視されてきたのに、いきなりトランプとの首脳会談を勝ち取ったからである。

金正恩にとっては、自らの国際的な正統性を内外に示す絶好な機会である。既に核弾頭も大陸間ミサイルも持っていると執拗に米国を恫喝してきたのは、冷たい米国に対する「求愛行為」に他ならなかった。北朝鮮にとって米国大統領と対等に会談できる栄誉は、体制保持にとって極めて貴重な成果なのである。

だからこそ、米国は民主党も共和党も「ご褒美」となる直接会談を拒否し続けてきた。それが、「核兵器を放棄する用意がある」という一言だけで手に入れたのだから、米国の強硬論者たちは「殿、なにとぞ騙されませぬように」と一斉に声を上げた。

その中には、金正恩の「試験禁止・先制使用禁止・移送禁止」提案を「非核化ではなく核兵器保有国宣言」と看破している者もいる。北朝鮮が、米国に求め続けていた「核保有国」の地位を簡単に手に入れてしまう状況なのである。

トランプにとっては、いま中間選挙が最重要であり、核ミサイルを米国に届かなくできれば成果である。タカ派の国務長官ポンペオは、「金正恩が核兵器で米国に脅威を与えないようにするのが私の責任だ」と、韓国や日本を除外することもあり得ると述べている。

「文禄・慶長の役」の後、幕府も李朝も内心では両国間の和平回復を強く望んでいた。しかし「建前」が大きく立ちはだかる。その中で両国間外交で生業を立てていた対馬藩が窮余の策として「国書偽造」を謀った。

おそらく幕府も李朝も薄々は「偽造」を知っていたに違いないが、己酉約条を締結する。

いまや、トランプも金正恩も自らの「手柄」を守るため、合意を必要としている。しかし、北朝鮮は最後まで核兵器を手放さないし、米国も『完全で検証可能かつ不可逆的な核・ミサイル廃棄』は譲れない。

そのためトランプは周辺を強硬派で固めた。強硬派が「韓国」を楯に「だまされた」振りをしても、いずれ実績が追いつくであろう。

仲裁者とは「その喧嘩、オレが預かる」と言えるほど両側に睨みが効き、時には自らの負担で纏め上げる力が必要だ。

うまく行ってもうまく行かなくとも、弱い仲裁者は必ず両側からむしられるのが宿命だ。成果だけトランプに持って行かれ、ツケは文在寅が払うことにならないことを祈っている。

新井　宏

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の**五月十九日**です。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室。

なお、五月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の**七月二十一日**です。

「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。「埋め草」も大歓迎。

出雲大社再考（一八）

空中神殿の謎（2）

『口遊』の新解釈

村上　邦治

本殿の高さが一六丈（四八㍍）であった史料として引用されるのが、平安中期当代の碩学源為憲が、天禄元年（九七〇）当時七歳であった蔵人頭藤原為光の長男誠信のために編纂した、暗誦用幼児教育書『口遊』である。例えば大橋では、「山太、近二、宇三」と覚える。一番の大橋は山崎橋、次は瀬田橋、三番目は宇治橋の意味である。

大屋（巨大建築物）は、「雲太、和二、京三」としている。高層順に出雲国城築明神（出雲大社）神殿、大和国東大寺大仏殿、京都朝堂院（八省）大極殿と記述した。二番目の大仏殿の高さは、何度か焼失したが創建時は一五丈の記録が残っている。大社神殿はそれより高いことから、一六丈（約四八㍍）の高さであった根拠としている。

三番の大極殿は、平安京遷都に合わせ朝堂院の正殿として七九五年完成した。八七九年応天門の変やその後相次ぐ火災で焼失、その後は再建されず規模を記したものはない。平城京大極殿は現在復元されており、二七㍍の高さであり、平安京大極殿は二五㍍から三〇㍍であったと思われる。

大社の高さを論じるとき、常に二位の大仏殿と比較されるが、新解釈として三位の大極殿に注目して考察してみたい。そうすると、『口遊』の記述にあてはまらない高層建物が出てくる。当時確実に存在したと思われるのは、法隆寺五重塔（三二㍍）、薬師寺東塔（五三㍍）がある。そして宇治にある醍醐寺の五重塔は、『口遊』完成の二〇年前九五一年竣工、三八㍍を誇り、京都に近くにあることから、京都では知らない者はいなかったろう。

これら五重塔相輪の長さを差し引くとしても、大極殿より高くなってしまう。この矛盾を解消するには、神社、寺院、その他建築物と区別して、各々の一番高い建物を指していると解釈することで解決する。もっともこの解釈を採用しない者は、「塔は除く」として、この矛盾を解消しようとするが、著者の為憲はどこにも記載していない。

一番目は神社、二番目は寺院、三番目はその他大屋と解釈すると、寺院の高層建築物が多く存在しても矛盾は解決する。作者為憲が書きたかったのは、「神社の中で最も高い建物は出雲大社本殿である」ということではなかろうか。とすると出雲大社の一六丈（四八㍍）説は、その根拠を失う。東大寺大仏殿より高層でなくてもかまわないことになる。

大社本殿の建築様式は大社造りと称され、ほかの神社とは全く異なる独特な造りである。間口と奥行きの幅が同じ正方形をしており、原始住宅を起源とした高床式の建物で、神社としては、もっとも高層建物であることには誰も異論はなかろう。寺院の最高が奈良大仏殿、京三を、神社、寺院を除くその他の大屋と解すれば、大極殿は納得できる。この解釈を採用すれば、出雲大社一六丈（四八㍍）説の根拠とされる『口遊』の「雲太、和二、京三」の記述から、空中神殿一六丈説を説明するには、困難と言わざるを得ない。

一六丈説を唱える『出雲大社』（千家尊統）、『出雲大社の本殿』（福山敏夫京大教授）は『口遊』をその拠り所とするが、解釈次第では、その根拠は崩れる。しかし何よりも『口遊』を、史料として採用すること自体に問題があろう。この本は単に貴族の子弟のために覚え易く語呂合わせした、幼児向けの書であることを忘れてはならない。

（この項つづく）

参考文献

『口遊注解』　幼学の会編黒田彰　勉誠社
『出雲大社日本の神祭りの源流』　柊風社

本邦の年輪年代の問題

（18.4.28）

高橋 正彦

【A 緒論 年輪年代の信憑性?】

年輪年代関し、出雲大社の発掘された巨大な3重柱根の年代は、「年輪年代から(1248年と)正確に年代特定されるそうですね」、とは村上氏の感想である。その言葉の裏には、一一年輪年代とは厳密な神託が下託された如くであるが、この神託は信ずべきなのか――との意味が込められている。

今回は青森新田遺跡出土のヒバの年輪年代に関する、東北大、準大学法人=地球研による年輪年代に関する新見解への、批判的評価(文末に摘示のデータ取扱いに関する不信感)に付いて、専門的知見外の立場ながらも、その端緒を掴み得る一視点の可能性を敢て提起する。

――箱崎真隆氏の青森ヒバに関する新見解の概要――

①新田遺跡のヒバに付て、8世紀末の宇宙線異常増大(世界的)現象の年次を検証した処、774―775年と成るべき処、光谷の与えた年輪年代では、【775―776年】 となる。

②そこで新田遺跡ヒバ年代に誤差ありとし、【全般的に年代を1年繰上げる事とした。】

③この操作は、地球研の中塚武教授の酸素同位体の年輪年代に整合する――とする。

――以下、箱崎氏等の年輪年代に関する疑問点を、逐次に挙げる――

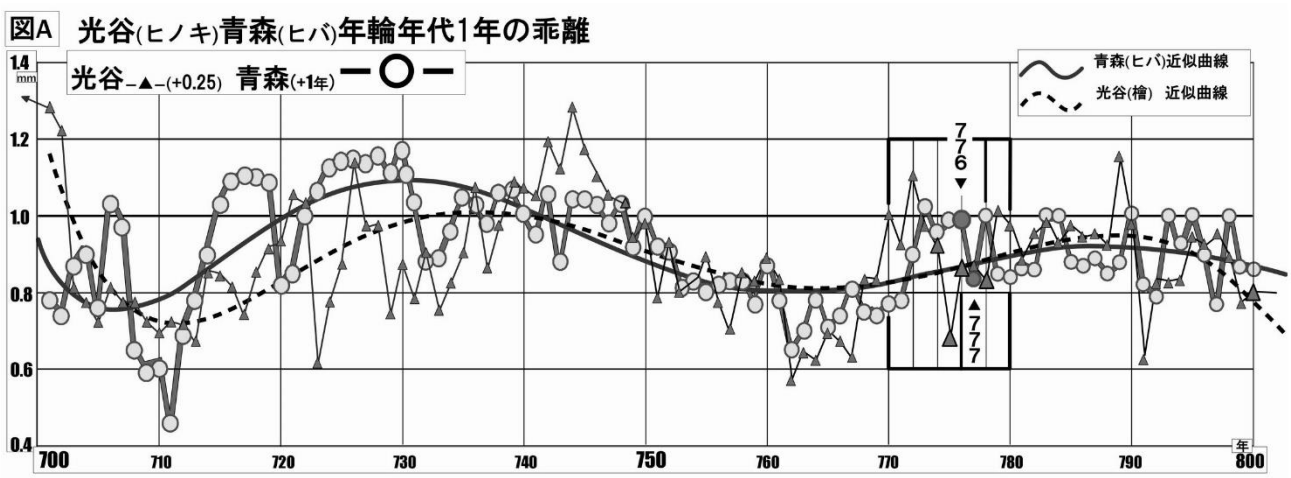
【B ①年輪年代の現状―― 実データを非表示】

年輪データの実態は図Cの様なものとなる。樹木1本=数百年分のデータが、数十点複合され多大となるので、実データ自体は明示されず、全体を左の様に図示した場合でも、図上では詳細な値に至るまで判別は出来ない。

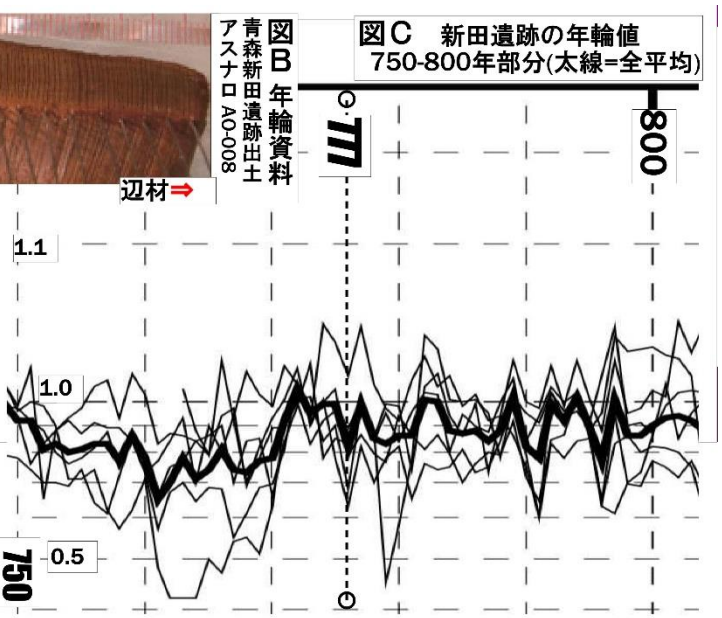
――そこで、各年輪データの類別・整理統合作業はPC上のみに依存し、部外者にその作業の詳細は明確に確認できない。

【B ②年輪年代の現状―― 基準年を非表示】

光谷年輪年代では、年輪パターンにおいて、【全ての基礎となる基準年代】が定義されていない。是を基準とする青森ヒバ年輪年



図B 年輪資料
青森新田遺跡出土
アスナロ A0-008



図B 青森新田遺跡ヒバ材(溝板材=No.008)
新幹線の新青森駅工事に伴い出土した、埋没した水利板材群の1例。ヒバ材の年輪年代より、これらの遺跡は平安後期(1000年頃)の集落及び井戸・水利関係の遺跡であると推定されている。(全44点)
ーー但し是等と異質の古い板材が2点含まれる。

図C 新田遺跡板材の年輪とその平均(太線)
各データはPCによって相互に最も相関する様に年次関係を揃える。(=クロスデート) その作業の当否は図の通り、極めて分かりずらい。

図A 青森ヒバと光谷ヒノキの年輪年代の対比
後者に対し前者のパターンを順次年次移動させて、両者の類似度(t値)を判定 すると、前者の年次が1年遅れている・かつ、740－ 800年に限るとした場合(上図)に限り、 極めて類似度が高い。

代でも、是は定義されていない。（「年輪パターンを持っていない」とする。） 又、中塚・酸素年輪年代でも、【全ての基礎となる基準年代】は明示・定義されていない。

（ 特に後者の年輪パターンは、意図的に極めて不明瞭である。）

【C】青森年輪年代の対応指針――2極対校を通した事実の顕示――

光谷年輪年代・青森ヒバ年輪年代共に確たる根拠不明確の場合、双方を仮説に留め置き対比する事により真実が顕現する場合がある。

①(光谷年輪の標準パターンは 500–1000 年に亙り、図上値は公開されている。）

② （是に対して、青森ヒバの年輪パターンの平均値は、図C＝線の通り概略は図上値で推定することができる。）

③そこで、両者の相対年次を1年ずつズラしながら、相互の類似係数(t値)及び近似曲線(6次)間の近似の状態を対比した。

④但し、両者の年輪幅の平均値に差がある場合(ヒノキの方が年輪緻密)、絶対的に相関度が低くなってしまうので、ヒノキ年輪幅に0.3㎜を加算し、人為的に両者が対等になるように調節を加えた。

⑤【この結果】700–800 年間において、図Aの通り青森年輪パターンを1年遅らせた場合に限り、極めてt値が高い事が明らかとなった(t=5.8)。

――――――――

【D】 青森・光谷年輪対校の結論

青森ヒバと光谷ヒノキ(本州中部)の年輪パターンは年次に1年乖離を認める場合、800年とり分け 740–800 年に限り、極めて変移パターンが近似しており、変移パターンには環境変動の法則性が反映している。

――ここから両者の年輪パターンには信憑性がある――と結論出来る。

――――――――

【E 青森・光谷年輪の絶対年代 ①】

更に、上の図Aの期間には年輪中の炭素14含有量に地球規模の極増期が含まれており、

●年代は【774–775 年】と確定されている。青森ヒバでは当初は光谷年代を基準に【775－776】年とされていたが、

●本稿では【776–777 年】に繰下げている。

ここから、光谷ヒノキのこの期間の年輪パターンには、実年代に対し【2年の遅れがある】と結論できる。

【F 青森・光谷年輪の絶対年代 ②】

是に対し600年前後の年輪パターンでは、両者に強い類似関係は認められないが、

● 紀元536年の全球的寒冷化の年次を、

● 両者とも535年とした形跡がある。

（年輪パターン図は省略）

――この場合両者共に(E)と異なり絶対年代に【1年の乖離がある】事となる――

600年前後の青森・光谷年輪年代の信憑性に関しては確証が足りない。箱崎論文はこれを補うものとして、酸素同位体による中塚年輪年代と、同年代法による青森年輪年代が合致すると主張する。然し、中塚年輪年代は実データ未公開であり、これを根拠(異種データの合致)とする事は出来ない。

【G 附説 箱崎年代に疑義を挟む端緒】

拙論は難しい(無駄)と良く言われる。是に対し私は次のような答えを用意している。

耐震偽装・巨額詐欺脱税・情報漏洩の捜査・裁判において、「専門外である・解らない」と言って、羊の如く騙される姿は人間の尊厳に拘わる。是に立ち向かう為には、

① 僅かな兆象を感取する力を持つ事、

② 難解な経理・物理用語に囚われず、是に独創的な解釈を提示出来る事、等々ジャーナリズム的発想が求められる。

――本件に関する心証・端緒――

は次の通りである。

①NT003(680-1040年)=太線に要約されるデータ7種のパターンの、各細線の開始年次が、柱状図の年次と全く合わない。(不可解)

②NT003等8種の大半が900年以降であり、900年以前データの出所が不明。(不可解)

③是等をNT003と総称するには作為感がある

④最古層の開始年次を表中で414年と記述するが、当初418年と決定の後、1年繰り上げ417年と訂正したはずで、相当に注意すべきである年次に重大な誤記がある。その背景として、年次が流動的であった可能性もあるが、著者の態度に違和感を禁じ得ない。

●茲から青森年輪年代に付いては、疑義の方向に舵を切り、更には、

●青森・光谷年輪パターンには相関がある

――との視点を提起した訳である

●本稿は「石江遺跡群」発掘調査報告」第4節=新田遺跡出土木材の年輪年代(箱崎正隆著)及び「西暦774-775年の14Cイベントと酸素同位体比年輪年代法に基づく青森市新田(1)遺跡のアスナロ材の歴年代の検証」(箱崎正隆著)―名古屋大学加速器分析報告書，v.27, 2016 を参考致しました

なを、年輪年代パターンの類似度関数の計算に関し、新井宏先生にExcel の表計算をご教示頂き、表計算を行いt値を算出致しました。

茲に御礼申し上げます。

学徒動員で狩り出された海軍飛行専修予備学生

千坂 精一

昭和九年（一九三四）海軍は将来の飛行機搭乗員士官の不足に備えて旧制大学や高等専門学校卒業生の志願制による飛行科予備士官制度を採用した。

一期生はたった六名だったが、太平洋戦争がはじまった翌年に入隊した十二期生までで総数五〇七名になったという。

開戦六箇月後のミッドウェー海戦で主力空母加賀、蒼龍、赤城、飛龍を失う未曾有の大惨敗を喫した日本政府は、慌てふためいて戦時体制を強化した。

翌十八年四月一日、旧制中学校の修業年限を一年短縮して四年制とし、教科書を国定化した。

その月二十八日には東京六大学野球聯盟を解散させた。

そして六月二十五日、政府は『学徒戦時動員体制確立要綱』を決定し、『勤労動員命令』により学徒は学業を休止して軍需生産に従事することを規定した。

九月十日、大学生は繰り上げ卒業となり、直ちに入隊となった。

十三期海軍飛行専修予備学生に合格した者は、十月一日に三重（津市香良洲町）と土浦（茨城県土浦市）の航空隊に入隊した。

十月十二日『教育に関する戦時非常措置方策』が決定し、理工科系と教育養成系以外の大学生の徴兵猶予が停止になり、二十一日に出陣学徒の壮行会が神宮外苑競技場で挙行され、七万人の学徒が銃を担いで折からの雨の中を大行進した。

十一月一日には『兵役法改正』で国民の兵役が四十五歳まで延長になり、さらに十二月二十四日に『徴兵適齢臨時特例』が公布され適齢を一年引下げて十九歳となった。

この適齢一年引下げと徴兵猶予停止による大学予科と高等専門学校在学中学徒の現役入隊により、学徒出陣数はさらに増加した。

こうして大学、高等専門学校学徒の動員で軍隊に狩り出された予備学生のうち、飛行専修予備学生を志願した者は、

昭和十八年十月一日入隊の十三期学生が、五、一九九名。

昭和十九年二月一日入隊の十四期学生と一期生徒が五、五二〇名。

同年十月一日入隊の十五期学生と二期生徒が三、六三八名。

昭和二十年入隊の十六期学生と三期生徒は二八五名であった。

制度発足以来の総人数は一五、一四九名で、うち戦没者は二、四八五名に及んだ。

とくに十三、十四期学生と一期生徒の多くは特攻出撃で戦死している。

特攻という爆弾を抱いた飛行機による体当たり攻撃は、昭和十九年十月のフィリピンレイテ沖海戦にはじまる。

十月十八日、捷一号作戦が発動された。

聯合艦隊の栗田、小澤、西村、志摩艦隊と太平洋艦隊とのレイテ湾洋上決戦にあたり、敵空母の飛行甲板を使用不能にする重要性が説かれ、前日第一航空艦隊司令長官としてマニラのマバラカット基地に着任した大西瀧治郎中将は、零戦に爆弾を抱かせて体当たり攻撃をさせることに決した。

そして麾下二〇一空の三〇一、三〇三、三〇五、三〇六、三一一飛行隊の零戦隊を敷島、大和、朝日、山桜の四隊に分けて二五〇キロ爆弾を抱かせ二十一日に出撃させたが、天候不良で引き返した。

このとき、大和隊を率いた久納好孚中尉機はレイテ湾に到着して艦隊に体当たりしたが戦果は確認できなかった。

指揮官關行男大尉はなんどか悪天候で引き返すことを繰り返し、四日後の二十五日に谷暢夫一飛曹機とようやく空母カリニン・ベイに体当たりして撃沈させたが、栗田艦隊はすでにレイテ湾突入を断念したあとであった。

關大尉は海兵七十期の指揮官であり、久納中尉は法大出身の十一期予備学生だったため面子に拘る軍令部は海軍兵学校出身の生粋の海軍軍人のほうを特攻第一号として発表した。

この特攻には、零戦隊にとどまらず七〇一空の一〇二、一〇三艦爆隊も出撃した。

全滅を免れた七〇一空は鹿児島県國分に帰還すると、一〇二飛行隊は千葉県香取基地で、一〇三飛行隊は國分基地で再建を急いだ。

再建なった一〇二飛行隊は臺灣新竹の七六五空に編入されて、特攻出撃してしまった。

七〇一空には一〇二飛行隊にかわって香取で結成された一〇五飛行隊が配属になり、第二國分基地（鹿児島県姶良郡溝邊町十三塚原）に飛来した。現在は町村合併で霧島市溝辺町になり跡地は鹿児島空港になっている。

そして、昭和二十年三月十一日。

カロリン諸島ウルシー環礁に太平洋艦隊の機動部隊が停泊して補給中との情報が入った。

菊水部隊と改称した五航艦司令部は直ちに銀河二四機に八〇〇キロ爆弾を抱かせて一二名搭乗の二式大艇の誘導で一四〇〇浬飛行時間一二時間の長躯特攻を命じて鹿屋を出撃させたが、遠距離のため途中故障機が続出して辛うじて一四機が到着したが、一一機突入したもののたいした戦果は得られず三機は暗夜の視認困難でヤップ島に不時着してしまった。

この特攻による戦死者総数四一名、士官二名は六名でうち予備士官四名であった。

また誘導機二式大艇のほうは戦死者総数一二名、うち士官二名は全員予備士官であった。

十七日深夜、機動部隊四群の北上が発見されたので、司令部は再建なった七〇一空にフィリピンに次ぐ二度目の特攻を命じた。

一國、二國から出撃した一〇三、一〇五両飛行隊は十八日、十九日、二十日の三日にわたって波状攻撃をかけた。

三日間の出撃機数四一機、戦死者数八〇名、士官二五名のうち予備士官一八名であった。

そして、二十一日から八月十三日にかけて神雷部隊の人間爆弾桜花隊と爆装零戦隊による生還のない特攻がはじまった。

桜花隊は一〇回の出撃で戦死者数五一名、士官一一名のうち予備士官一〇名であった。

爆戦隊は一三回の出撃で戦死者数九九名、うち士官二五名はいずれも予備士官であった。

さらに最後の特攻は八月十五日夕刻宇垣長官出陣の供を命ぜられた七〇一空彗星隊の一一機二二名で、士官七名のうち予備士官は四名であった。

予備士官の特攻戦死者は昭和十八年十月一日入隊の十三期がほとんどで、翌年五月三十一日に少尉に任官、このときは中尉であった。

このことから飛行隊のなかでは、

「十三期の予備学生は特攻専門士官である」

と吹聴されていた。

これは戦没飛行予備学生手記『雲ながるる果てに』のなかにも川柳で載っている。

ついでなから、フィリピン・國分・大分から三度も特攻出撃した航空隊は七〇一空のほかに例がない。

学徒動員で無理矢理軍隊に狩り出されたあの『学徒戦時動員体制確立要綱』がなかったなら、あの人たちは無事に学業を終え、社会人として大いに活躍する人生を送れたであろうと思うと、なんとも気の毒でならない。有能な人材を喪ってしまったことが悔やまれる。

（了）

「藤枝」散策

中島　茂

春たけなわとなりました。ご無沙汰しておりますが、貴君にはお元気でお過ごしのことと存じます。

さて、先日久しぶりに藤枝に行ってきました。

ＪＲで静岡駅から二十分。人口十四万ほどの市ですが、自然と歴史・文化に恵まれた味わいのある街です。

まず藤枝駅前からタクシーで国指定史跡の「志太郡衙跡」に向いました。奈良・平安時代の駿河国志太郡の役所跡です。

低い丘を背にしたこの地は静寂そのものでした。

昭和五十二年の発掘調査で、石敷の道路や板塀に囲まれた三十棟の掘立柱の建物跡が発見され、出土した墨書土器により、「郡衙跡」と裏付けられました。

資料館で発掘された土器の数々を見たあと、復原された一部の建物をまわってみました。

ここから徒歩十五分ほど、勝草橋で瀬戸川（天井川の典型です）を越えました。

この辺りからがかつての「藤枝の宿」にあたり、「上伝馬」・「下伝馬」などの地名が往時を偲ばせます。

中途から道を折れ、「蓮華寺池公園」に着きました。

「蓮華寺池」は江戸時代初期以来農業用水池でしたが、近年観光地として整備され、周囲ほぼ一・五キロ、四季折々の花が彩りを添えますが、とくに藤の満開のころがすばらしく、多くの人々が集まります。

この日はあいにく水がえの時期にあたっていましたが、それでも春休みとあって、親子づれがちらほらと見られました。

昼食後、北の「大手」に向う途中、かつて勤務した「藤枝東高校」を覗いてみました。

二年間の短い勤務でしたが、その間サッカー部が全日本ユース選手権大会で優勝するなど忘れがたい思い出のある学校です。

なつかしいグランドが全面芝になっていたのには驚きました。

ここから「大手」を経て、最後の見学地「田中城跡」を目指しました。

「大手」とはかつての田中城の大手口に由来する地名で、今も藤枝市の交通の要衝となっています。

そこから東に向う「田中」には江戸時代田中藩が置かれ、駿府の西の守りとして重きをなし、譜代大名が治めていました。

石高は四万石前後ですが、入城・転出に際し加封された者、幕府の要職に任じられた者も多く、田中城は「出世城」とも言われます。

この城は四つの曲輪と四つの堀が同心円上に配置されており、別名「亀城」・「亀甲城」と呼ばれていました。

維新後の明治四年に廃城になり、その土地の多くは民有地となり姿を変えていきましたが、現在でも城の円形の堀の跡や円形の石垣の跡が各所に残っています。

とは言っても、しろうとの見学者がそれらを見つけるのはなかなか大変です。

私が立ち寄った大きな農家の年配の御主人は親切な方で、附近を案内して見学のポイントを教えてくれ、往時の貴重な写真の数々を見せてくれました。

この地に誇りをもち、しっかり根を張って生きておられる方の風格を感じました。

「大手」からバスで「藤枝駅前」に戻ると四時。

南北に長いこの街はバスが一時間に三本ほどで、タクシーもつかまえにくい不便さはありますが、一日ゆっくり散策を楽しむのも一興かと存じます。

再会の日を楽しみにしております。

お元気でお過し下さい。

平成三十年四月九日

藤枝市の藤まつり
（藤枝市ホームページより）

志太郡衙跡（ウィキペディアより）

写真は原文には有りませんでしたが、余白が生じましたので、藤枝市ホームページやウィキペディアより借用しました。

第一次世界大戦とモンテネグロ

新井 宏

モンテネグロと云う国がどこにあるかご存知であろうか。

ネグロという音からアフリカを連想する方がいるかもしれない。あるいは、南米にネグロ河がいくつかあるので、南米のどこかと思う方もいるだろう。それほどに良く知られていない小国であるが、語源はイタリア語で「黒い山」を意味し、アドリア海沿いのバルカン半島南部に存在する。

そのことからも分かるように、歴史的にはオスマントルコ帝国の他にベネチアの影響を強く受けていて、クロアチアの名勝地ドゥブロブニク港の南五十キロメートルにあるコトル港も、ドゥブロブニク港と共に、美しい世界遺産として知られている。

そのモンテネグロ公国が、第一次世界大戦の時、ロシア帝国との同盟関係で、三国協商側として六番目に参戦している。そんなことを知ったのは、第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして次に起こるかも知れない「戦争」の性格を勉強している過程であった。

第一次世界大戦の前夜、ヨーロッパでは、まだ戦争は「他の手段による外交」として「ゲームの要素」を多分に残していた。例えば、当時の大戦争、クリミア戦争、普仏戦争、日露戦争でも、非常に多くの戦死者を記録しているが、それでも三十万人以下であり、第一次世界大戦の八百五十万人よりはるかに少なく、ある意味で「外交ゲーム」の一部として理解し得るレベルであった。

第一次世界大戦の宣戦布告日付と布告順

	オーストリアハンガリー帝国	ドイツ帝国	オスマントルコ帝国	ブルガリア
セルビア	1 ↓ 14.07.28	6 → 14.08.06	14 → 14.11.02	19 ↓ 15.10.14
ロシア	5 ↓ 14.08.06	2 ↓ 14.08.01	13 → 14.11.01	23 → 15.10.19
フランス	8 → 14.08.11	3 ↓ 14.08.03	16 → 14.11.05	22 → 15.10.16
ベルギー	10 ↓ 14.08.22	3 ↓ 14.08.03		
イギリス	9 → 14.08.12	5 → 14.08.04	16 → 14.11.05	20 → 15.10.15
モンテネグロ		7 → 14.08.09	15 → 14.11.03	20 → 15.10.15
日本	12 → 14.08.25	11 → 14.08.23		
イタリア	17 → 15.05.23	27 → 16.08.27	18 → 15.08.21	23 → 15.10.19
ポルトガル	26 ↓ 16.03.15	25 ↓ 16.03.09		
ルーマニア	27 → 16.08.27	27 → 16.08.27	30 ↓ 16.08.30	31 ↓ 16.09.01
米国	→ 17.11.07	32 → 17.04.06	36 ↓ 17.04.20	34 ↓ 17.04.10
キューバ	→ 17.11.10	33 → 17.04.07		
ボリビア		35 → 17.04.13		
ギリシャ	37 → 17.07.02	37 → 17.07.02	37 → 17.07.02	37 → 17.07.02
タイ	41 → 17.07.22	41 → 17.07.22		
リベリア		43 → 17.08.04		
中華民国	44 → 17.08.14	44 → 17.08.14		
ペルー		46 → 17.10.06		
ウルグアイ		47 → 17.10.07		
ブラジル		48 → 17.10.26		
エクアドル		49 → 17.11.07		
パナマ	50 → 17.11.10			
グァテマラ		51 → 18.04.23		
ニカラグア	52 → 18.05.08	52 → 18.05.08		
コスタリカ		54 → 18.05.23		
ハイチ		55 → 18.07.14		
ホンジュラス		56 → 18.07.19		

もちろん第一次世界大戦の始まりとなった、オーストリア＝ハンガリー帝国（オーストリア）のセビリアへの宣戦布告にしても当事者にとっては「他の手段による外交」のつもりであった。ところが複雑化した国際関係によって「チキンゲーム」と化してしまい、いずれの主要参戦国も予想もしていなかった大損害を被ってしまう。

なぜ、このような大悲劇に至ったのであろうか。そのために、第一次世界大戦勃発の頃の外交ゲームを知りたいと思った。

一言で言えば、第一次世界大戦の前夜、輻輳した状況下にあって、三国同盟（独・墺・伊）と三国協商（英・仏・露）＋日英同盟の枠組みがほぼでき上っていた。

その中で一九〇八年にオスマン帝国（トルコ）の支配下にあったバルカン半島北部のボスニア・ヘルツェゴビナがオーストリアに併合され、続く一九一二～一三年のバルカン戦争によってバルカン諸国が全てオスマン帝国の支配下から離脱してしまった。

その結果として、バルカン半島では同じスラブ系のロシアが影響力を強めてオーストリアと対立を深める。

その渦中、一九一四年六月二十八日に、オーストリア・ハンガリー帝国の皇位継承者フェルディナント大公がサラエヴォで汎スラブ国粋主義者のセルビア人により暗殺される事件が起った。

そして、ちょうど一か月後の一九一四年七月二十八日、オーストリア＝ハンガリー帝国はセルビアに宣戦布告するのである。

それは従来の概念による極地戦争のはずであった。ところが、その後、各国の利害から宣戦布告が相次ぎ、最終的に米国がオーストリア・ハンガリー帝国に宣戦布告したのは三年半後になる。

その間の参戦国の宣戦布告日を別表に整理してみた。ややこしい解説を長々と読むよりも、何となくわかったような気がする。

オーストリアのセビリアへの宣戦布告から四日後に、オーストリアと同盟関係にあったドイツがロシアに宣戦布告し、更にはその二日後にフランス、ベルギーに対しても相次いで宣戦布告している。その結果を受けて、その翌日には、今度は逆に、英国（連邦）がドイツに宣戦布告した。

更にはその翌日、すなわち八月四日には、オーストリア＝ハンガリー帝国がロシアに宣戦布告している。ここまでに、主要参戦国はイタリア、日本、米国を除いて全て出そろった。

実はその直後に参戦したのがバルカン半島の小国モンテネグロ公国なのである。

モンテネグロという国は現在もバルカン半島に存在していて、人口は日本で最小の島根県や島根県なみ、面積は四国の半分程度である。このモンテネグロ公国がドイツに対して宣戦布告したのが八月九日であり、オーストリア＝ハンガリー帝国がロシアに宣戦布告した三日後なのである。

モンテネグロ公国はロシアと同盟関係にあった。同盟という言葉は軍事同盟を意味しているようで、いずれかの国が戦争に巻き込まれると参戦する義務があったらしい。

いやそればかりではない。一九〇五年の日露戦争の際にもモンテネグロ公国は日本に宣戦布告していたのである。

本当か否か定かではないが、当時の日本はモンテネグロ公国の存在を知らなかったと云い、しかも実際の戦闘とは無関係だったので、結果として何の対応も取らなかった。そのため、ポーツマス条約においても日本はモンテネグロとの戦争終結について何の処置もしていない。

その後、モンテネグロ公国は一九一八年にセビリアに吸収され消滅してしまったが、第二次世界大戦後にユーゴスラビア連邦の一部となり、その解体後にセルビア・モンテネグロ連邦、そして二〇〇六年にはその連邦から独立する。

外交というものは、形式を重んじる。日本とモンテネグロは未だ戦争を終結していないと問題を提起したのは、かの有名な鈴木宗男衆議院議員である。どうやらその時もウヤムヤに終ったようであるが、やっと百年ぶりに戦争状態は終結した。何とのんびりした話であろうか。

歴史的にみると、セビリアは長い間オスマン帝国の領土となっていたが、モンテネグロはベネチアとの交易の窓口として帝国の属領となながら独立国を保っていた。しかし基本的には、両国は民族的にも文化的にも非常に良く似ているという。

そのモンテネグロがセビリア・モンテネグロ連邦から分離独立したのは、セビリアがコソボ問題でＥＵから制裁を受けた際にモンテネグロ地域が不利益を被ったからだという。ベネチアとの交易港として西欧に開かれた歴史を持っていたからであろう。

ところでそのモンテネグロに「十戒」があると言う。

怠惰を極めた内容で、インターネット上にいくつか紹介されている。面白いので、サイト(https://ruuski.net/)から転載する。

1. 人間は疲れて生まれてくる。そして休むために生きているのだ。
2. 自分自身のように自分の布団を愛せ
3. 夜よく眠れるよう日中は休息すべし
4. 働くな。仕事はあなたを死に追いやるのだ
5. 休息している人を見たなら、助けを差し伸べなさい
6. できるだけ少なく働きなさい。もしできるなら他の人にやらせなさい
7. 木陰は救いである。そこで休むものは未だかつて死んだことがない
8. 労働はあなたを病へと導く。若いうちに死んではいけない
9. もし突然に働きたいという願いが沸き起こったなら、まず座り、冷静になれ。そのうちその願いは消えるだろう
10. 飲み、食べている人たちを見つけたなら、彼らに加わりなさい。働いている人を見たなら、すぐさま遠ざかりなさい。彼らを邪魔してはいけないのだ

さて、最後に第一次世界大戦と日本の関係について、まとめておこう。

日本がドイツに宣戦布告したのが、開戦から約一か月遅れの八月二十三日である。だから日本は日英同盟に基づき自動的に参戦したのではない。それは英国側の要請が二転三転したからである。英国は当初、日本の参戦地域を太平洋地域に限定するつもりであった。しかし、戦線の拡大によって日本に対する期待が次々に高まる。

一方、日本は直接国益に関連しない地域での参戦には消極的であった。

そのような経過があったため、日本は大きな犠牲を伴うことなく、ヴェルサイユ条約においてドイツの山東省権益やパラオやマーシャル諸島などの委任統治権を譲り受け、国際連盟の常任理事国となる成果を得た。まさに「他の手段による外交」を成功させたのは日本のみであった。それが第二次世界大戦における楽観視を増長させてしまったのであろうか。

実際には、第一次世界大戦の結果、戦勝国さえも大きな犠牲を払いながら得るものが極めて少なかった。フランスはドイツに対して天文学的な賠償を課したが、それが第二次世界大戦の要因となり、世界史的な失敗につながった。もはや、戦争は「他の手段による外交」などと位置付けてはいられなくなってしまった。

半周遅れで走っていた日本は、その厳しさを学ばなかった。核兵器や長距離ミサイルという魔の兵器が小規模な暴力国家により開発され、外交の武器とされている。戦争が「他の手段による外交」などと位置づけられていた時代は終わった。第二次世界大戦でいやというほど学んだ結果を、今後、日本は生かして行けるのであろうか。

ともすると、北朝鮮やシリアの理不尽さに腹を立てているが、外交が「他の手段による戦争」として定着する日がいつくるのであろうか。

終りになりましたが、当会にはバルカン半島問題の権威者、太田精一氏が居られます。

馬鹿なことを書いていると言われそうですが、まあ「独断と偏見」です。